

Title	農工調整問題の展望
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.8 (1943. 8) ,p.714(42)- 739(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19430801-0042
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430801-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

農工調整問題の展望

奥井復太郎

大東亞戦争の勃發並びに其の完遂のため日本産業經濟が一大轉換を経験しつゝある事は今更云ふ迄もなく、又大東亞經濟共榮圏の確定といふ長期的課題についても同じ經驗が要請されてゐる。併し此の轉換が戦局の動向推移、其の様相によつて極度に逼迫した事態の裡に行はれなければならぬ事が現在の特徴である。凡そ轉換は事態の緩急、條件の整否によつて著しく問題的になる。戦争自體が既に緊急にして條件完備を俟つを許さぬものである以上、今回の大東亞戦争が決戦の連続といふ特殊な形態をとつて來てゐる場合、即ち單純な長期戦でもなく、さりとて勿論、短期戦でもないと言ふ、云はゞ長期戦的短期戦とも名づくべき様相を呈して來る場合にあつては、此の轉換たるや最も難しい問題たらざるを得なくなる。若し單純短期戦であるならば全力を挙げ爾他を無視して一氣に短期戦決勝に導けばいい。反對に單純に考へられてゐた様な長期戦ならば悠々と自らを整備し補強しつゝ將來の勝利を捉へればいい。併し此のいづれもが今次戦争にあてはまらぬ事は周知の通である。

従つて新舊の交代、それによる諸々の關係の調整が時間的に備へられない儘で轉換、と云ふよりは新しい變化がどゞ／＼進められて行く。舊いもの、緊急ならざるものが充分整理されてゐない、其處へ新しい緊急的なものが創

設され進出して行く、新しい條件、新しい關係が整備されないうちに緊切要求に基く新しいものがどゞ／＼現はれて其の落付き先に迷ふ。斯くの如くして異常な混亂の生ずるのは、かゝる情勢に於ける轉換のやむを得ざる事態である。かうした事態の一つとして本稿は本邦に於ける農工調整問題を取り上げる。

二

農工調整問題は二つの方面を持つ。其の一つは日本産業經濟新編成としての農工業の在り方の問題であつて、從來から農業立國とか工業立國乃至は農工並立といふ様に云はれてゐた問題である。此の問題は單に戦争遂行上のみならず大東亞共榮圏建設の理想に照しても慎重に充分考ふ可き問題である。たゞ我國の在り方としては屢々閣議決定文は國策として農工兩全が採用され或ひは農民人口四割確保が確定せられてゐる建前上、之れに對して輕々に異を唱ふる事は許されない。唯農業といひ工業と云つても其の種目の内地的構成の如何は充分今後なほ討究に値する。大東亞經濟懇談會で決定した産業立地大綱としては(一)製鐵事業の新規擴充は滿洲北支を重點とし(二)石炭鑛業は主として北支滿洲の開發によらしめ(三)天然石油の開發は主力を南方に傾注し、人造石油にありては滿洲、樺太、北海道、北支を中心として擴充をなし、(四)アルミニウム工業は當面には朝鮮、滿洲、將來は北支及南方にもその確立擴充を圖る、(五)纖維工業については本邦の施設を一定範圍に止め他は情況に應じて逐次共榮圏内の他地域へ計畫的移駐をなさしめる、(六)従つて本邦にありては精密工業、機械工業、兵器工業等の高度工業に重點を置く、と示されてゐるが斯くの如き産業立地の根本的課題は充分に検討されると共に其れが實現に向つての政治・經濟・社會的努力が寸隙も許さずに行はねばならぬ。

斯かる關係に於いての農工調整問題を第一とすれば、第二の問題は國策として示された本邦農工業の在り方を國

策の根本方針に反馳せぬ様にあらしめるには如何にすべきやと云ふ點にかかつて来る。主要食糧の自給、健全農民の確保を唱へ、他方に高度工業の飛躍的發展を國內に計らうとする場合、實際の計畫や設定が農業を衰退せしめ農民の健全性を破毀し、或ひは工業の精度高度性の實現を妨ぐる様な事態を伴はしたとすれば之れは正さに國策に反背する設定と云はねばならぬ。斯くの如くして農工調整問題の第二の課題は、いはゞ技術的課題として登場して来る。云はゞ國土計畫的觀點から捉へられた問題となつて来る。之れが近時喧しく唱導せられてゐる農工調整問題である。

三

何故に此の種の農工調整問題を國土計畫的課題と云ふか。元來人間の勤勞、従つて産業の繁榮文化の向上、人口の増加向上、その他いづれにもせよ人間社會の經濟的文化的向上進歩は勤勞及び生活諸條件の整備に俟つところ極めて大である。一般的に云へば、それは環境の調整である。古くは孟母三遷として訓へられてゐるが、無計畫的な大都市の混亂が肉體的精神的並びに社會的疾患や弊害を助長し農業不振農村窮迫が健全農民の退化を促進する等具體的事例を挙げれば無數である。國土計畫は此の點に於いて人口・資本・富の合理的な綜合的空間配置によつて國家の經濟・社會・文化生活の最高能率を發揮せしめんとするものであるからして、云はゞ新しき要求に基く新しき環境整備の技術とも云ふ事が出来る。従つて皇國農村の保全を一方に狙ひ乍ら、他方に高度機械工業の地方分散——大都市集中の各方面に於ける弊害を除去するために地方分散を企圖するとすれば當然、人口・資本・富についての新しき空間的配置が問題とされねばならぬ、故に農工調整問題は此の意味に於いての國土計畫的課題であり得る。

併し國土計畫的課題であるとしても(嚴密に云へば國土計畫的課題であればこそ)此の觀點よりする農工調整問題は關係各研究領域の協力指導に俟つところが頗る多い。例へば産業としての農業經營の在り方、即ち專業農家とか其の適正規模とかいふ點に就いては農業經濟學の學問的領域に屬するであらうし、勞働力供出に關しては人口理論的検討を俟たねばならぬ。工場規模の適正化については工場經營理論の側から問題が闡明せられねばならぬし、農民生活、農民社會の問題に就いては社會學殊に農村社會學の負擔すべき課題が多い。生活集團の合理適正化に就いては都市社會學又は都市經濟學の研究が指導するであらう。その他可なり多くの方面に互つての科學又は研究分野が農工調整の問題には深い關係を持つて来る。國土計畫の中心問題がさうした意味の綜合的理論化又は體系化であると同樣に農工調整問題も亦さうでなければならぬ。

今日問題が深刻切迫せるものとして取り上げられる所以は、冒頭にも述べた通り急轉換の時局的要請に基く此の計畫の無計畫性又は非綜合性に基くのであつて、工業地域増成の問題、工場建設の問題等が各官廳各部局又は各業者間に於いて、極端に云へばバラバラに企圖され遂行されるといふ事に起因するものが多いのである。大規模な工場敷地の要求は地方分散の建前上では當然、農地の大規模潰廢を齎すであらうし、同様に急激なる工業勞務者の吸收は農村の農業人口の狹窄といふ結果を導いて来る。若し是等の間に中央的な強力な統制と賢明なる綜合的體系的指導が缺けてゐると問題は相互相抵觸し衝突し、惹いては國策の圓滑なる遂行に支障を來す事となる。農工調整問題を焦眉の急の問題として取り上げる所以は此の點、即ち國策遂行上に支障なきや否やの中心點に懸るからである。

四

扱、農工調整問題は先づ工業の地方分散といふ過程から生ずる。工業の地方分散、殊に大都市又は大都市周邊の大工業地帯に於ける巨大なる工場集積を可及的に分散せしめるといふ事は、既に國土計畫上の要請であつて此の意

味で消極的措置としては工業規制地域に關する處置がある。詳しく云へば昭和十七年六月二日閣議決定を見、翌日施行せられた「工業規制地域及工業建設地域に關する暫定措置」は京濱、中京、京阪神、北九州の我國四大工業地帯に於ける工場の巨大集積を、本邦産業の軍需工業の大轉換に呼應して更に集中過大とならざる様措置するものであつて、工場の新增設を是等四地域に於いては原則的に禁止すると共に、積極的には新しき地域を指定して新興工業又は重點工業の新經營を其の地に起さしめんとするにある。即ち、四大工業地域に對しては工場の新設又は増設の規制を行ふと共に内地に於いては差當り急速に生産力擴充を必要とする業種につき工業建設候補地を定め是等の地域に對して立地條件の整備を圖り以つて内地に於ける産業の合理的進展を計らうとする。

故に過大都市又は過大工業地帯が時局的急轉換によつて更に過大集積を惹起し、以つて防空的脆弱、工業勞務問題の重大化、更に所謂過大都市に就いて屢々唱へらるゝ一般的諸弊害等を倍加助長するの懼、頗る大である限り、是等の地域を規制地域とする事は云ふまでもなく至當である。

元來、此の種の問題については從來の經過——大都市の累進的膨脹——に對して消極的に抑制するか、或ひは積極的に他地方に吸引せしめるかは常に問題として議論の岐れる所であつた。一方の論者は先づ抑制せよと云ひ、他方の論者は此の集中にはそれだけの利便があるによるものなるを以つて、若し之れを阻止せんとするならば豫め他に、此の利便に勝る條件を整備すべきであると云ふ。此の兩論いづれが至當なりやは必ずしも簡単に解答を與へられない。何故かと云へば單に阻止する事に止めては、他の論者の云ふ如く、内地に於いて新しく擴充を要求された工業が果して要請に應ふるだけの業績を擧げ得る様な立地條件を他に求め得るや否や疑問だからである。さりとて他に立地條件の整備がないから、從來の工業中心地に否應なしに集中して差支なしといふが如きも前記の過大集

積の弊を加速度的に増大する丈けであつて最も危険といはねばならぬ。故に正しき方法は先づ抑制すると共に他方に新設工業地域の立地條件整備を急がねばならぬ。前記の暫定措置が工業規制と工業建設とを同時に示してゐるのは此の理に基く。唯々規制乃至抑制は一片の規則を以つて可能となるが誘致新設の問題に至りては環境整備についての工作が必要であるが故に決して簡單ではない。今日の問題が此の規制と建設とが問題として同一性質でなく後者が動もすれば遅れ勝ちであるところに起因してゐる事は自明である。然かも此の種の新しき條件整備たるや、切迫せる情況裡に之れを急速に實現する事極めて困難なるを以つて問題の重要且つ緊急を要するを知り乍ら、場合によつては如何とも爲し難い程絶望感に陥る事少くない。農工調整問題についての検討に際しても、積極的對策が望まれ乍らも、即時行ひ得べきものとしては、「行ひ得べき範圍内で然かもなほ解決に資するものがある」と云ふ結論に到達するが如き、此の例に外ならぬ。

なほ前記工業規制地域に關する暫定措置に關しては重要な例外規定ある爲めに或ひは此の規制の効力を疑ふ者もある。即ち(一)金屬工業、機械器具工業又は軍需充足上必要な化學工業にして既存設備の能率的利用を爲さしむる爲め特に擴充をする必要がある場合、若くは既設の企業と分離して規制地域外に立地することが當面の軍需生産擴充上甚しき支障を生ずる場合、並びに(二)本措置決定前既に法定の許可を受けて事業に着手し之れを中止せしむることが事業者に甚しき損失を與ふる場合に於いては規制地域内に於ける工場の新增設に關して特例が認められる。

併し其の特例が實際上どれ丈け既存大都市又は大工業地帯の過度集積を繼續せしめ、以つて抑制措置を無効ならしめてゐるか否かを別としても滔々たる工場の地方進出は否定すべくも無い。如何なる地方に如何なる工場が進出

發展したかに就いて具體的に云ふ事は出来ないとしても地方小都市の急激な興隆、人口の増加は殆ど其の大部分が工場地方分散の結果と見て差支ない。故に抑制によつて既存の過大中心の弊害が一應停止せられたか否かは別としても前述した様に、新しきものを受入れる用意の最も整はざる所に、既に廣汎な分散現象が生じてゐるといふ事實は否定出来ない。

農村が工場の地方分散を前にして新しき型式をとる可きや否やは、それ自身が問題であらうが、後述する様に比較的大都市又は工場工業生活との直面的關係の無かつた事態のままに於いて大工場が農村と直接的接觸を行ふ事ともなれば當然何等かの意味及び形式に於いて新しき農村の在り方も考へらる可きであらう。此の變革が用意深く行はれない時、即ち在來のままのところ、新しき一方的變化を持ち込めば混亂の生ずる事自明である。

五

概、工場地方分散に就いて生ずる諸問題を各方面から検討するに先立つて其の概括を展望すれば、(一)農業方面に於ける問題(二)工業方面に於ける問題(三)生活環境の問題及び(四)人口問題等に分ける事が出来る。農業方面の問題としては産業問題であり農業經營の問題である。工業方面の問題としては主として勞務問題であり或ひは輸送交通問題も工業經營上の觀點から問題となつて来る。第三の生活環境の問題は農村社會及び工場地域の生活問題であり、最後の人口問題は農業人口にせよ工業人口にせよ、工場の地方分散に伴つて如何なる變化が起るかの問題に關聯する。

本稿に於いて是等全部に互り詳細に論ずる事は不可能であるが、農工調整問題の具體的諸問題はいづれも殆ど全部、是等四つの分類の内に包含せられるであらう。此の前提の下に茲では具體的問題を列挙してみようと思ふ。

第一に農業上の問題として提起せらる可きものとしては農耕地潰廢が取り上げらる可きであらう。農耕地の潰廢が幾面積に及ぶかは當局の數字に俟つとして常人は地方進出の諸大工場が皆て農作物の作られてゐた可なり廣面積の土地を耕作から引離してゐる光景を目撃する。たゞ農耕地潰廢の在り方も決して一様でなく(一)本來の工場敷地として潰廢されるもの(二)過渡的地帯として荒蕪地化するもの(三)耕作放棄によるもの等がある。實際に工場の建設と共にその敷地として耕作を離れる土地も決して僅少ではあるまいが、軍需工業の擴充が地方に立地せしむる必要ある限りに於いて此の種の必要面積が農耕地から離脱するは止むを得ない事であらう。たゞ此の場合常に指摘せらるゝ點は、工場敷地が必ずやその必要面積に止まつてゐるか否かの點で、換言すれば不必要に廣汎な土地が工場敷地として取り除かれてゐるのではないかといふ疑問が提出されてゐる。第三の點は同じ面積の農耕地が潰廢せらるゝにしても地味豊度の如何によつて、問題は單なる面積そのものでなく、土地の産出力の大小である。従つて工場敷地として良田美田が潰される事なきやといふ點に就いて懸念せられてゐる。つまり工業用地としては地形、位置、面積等が主たる條件となるが故に、殊更に美田熟田を其の爲めに使用する必要は毫もない。或ひは大なる不利不便なくして代替し得るものならば附近の荒蕪地林地等が率先に工場敷地として用ひらる可きではないかといふ疑問は當然である。

過渡的地帯として荒蕪化する農地現象は其の非をならす事極めて易くして然かも實際上には伸々是正し難き現象である。土地所有の關係から將來の高度利用を見越して現代的利用に精進せざる事は、急激な發展過程に續く期間に於いて屢々見る所であつて工場の地方進出の場合にありては住宅化又は其の他非農耕地化の近き將來にあるを期待しつゝ土地改良又は耕作努力に専念する事を妨げる。此の種の荒蕪地化は大工場附近の土地に最も多く認めら

れる。
第三の耕作放棄による田畑の荒廢は主として耕作者自體の利害關係によるもので其の意味では寧ろ農業勞務の問題と見る事が出来る。つまり一農家内の勞働人口の漸減に伴ひ從來の耕作面積を維持する事が困難になり一部放棄されて荒蕪地化する場合もあれば、一家殆ど全部をあげて離農する爲めに全部的に耕作の放棄せらるゝ場合もあり、いづれも農耕地の潰廢に拍車をかける。

農耕地潰廢を斯くの如く純粹に農耕地の換轉と見、森林原野地の換轉を度外視し、さて其の内如何なる原因に基く潰廢が最も決定的であるかを吟味すれば、面積的には工場敷地化するものが最も大であらうが、それは上述せる如く必要面積を確保する限りに於いては止むを得ざるものであり、此の點臨時農地管理令に於いて其の止むを得ざるものに就き具體的に其の面積、農地の性質に就き適當なる指示を爲し得る事になつてゐる。唯前述した様に不必要に廣過ぎる面積が工場敷地として確保せられ、然かも多年の間實際に利用されずに徒らに放置せらるゝが如きは決して皆無とは云へない。後述するが如く工場内の建物の配置が徒らに開疎してゐる場合も此の例に擧げられるであらう。工場敷地に關する此の部分の不要性と、避け得べき場合に若干の勞を惜んで貴重なる良田良畑を殊更に耕作より放つが如き事は嚴重に警められねばならぬ。

此の點を別に考ふれば第二の推移的地帯としての荒蕪化は土地所有者の恩恵によるものであるからして性質上は悪性と云ふ可きもので之れに對しては相當の土地管理に關する對策が必要とならう。唯此の問題は偏へて農家側に於いて決定し得る問題でなく工場側にも關係を持つもので解決の要は所謂推移性を持たしめざる様に處置すべきである。

第三の農業勞務の缺乏不足から耕作放棄するものについては農地管理令其他で有効的に處置すべきであり、茲に問題は農家勞務の多寡精粗の問題となつて来る。

六

工場の地方進出が附近農家に及ぼす影響は農家勞力の工業轉換といふ問題を含む。此の事は農工調整問題に於いて兼業農家乃至は所謂職工農家の問題として取り上げられる。最近に於ける兼業農家の激増は、兼業農家と標識せらるゝ實體如何の問題もあるが、既に當局の統計に於いて頗る甚大なるものとせられ、其の反面が皇國農村確立の對策中にも專業農家創設擴充の提唱となつて現はれてゐる次第である。

然かも農家にして他の職業を兼ねる者、從來より必ずしも少しとしないが、今日問題の焦點をなすものは新しき形態として現はれた職工農家(又は工員農家)の出現で之れが幾多の問題を生み出しつゝある。併し農村社會及び其の生活の問題としての一面は後段に取扱ふとして、農業經營の點から見れば職工農家の持つ弱點は農業生産力減退の問題に存する。即ち一定の家族構成を持つ在來の農家にして比較的靑壯年層の家族員を工場に送る事となれば直ちに農業勞働力の量的不足を來すと共に殘留勞働力の必然的な質低下を招來し、茲に農業生産力の増進は否るか、反對に其の減退の危険を減するに到る。特に留意せらる可き現象は農家の工員化と共に專業農家的な供出力を著しく喪失し、所謂飯米農家化し自家供給化する懼が多分にある事である。工場地方分散に伴ふ、さうした農村への影響について此の種の職工農家が家計的には一方に食糧その他の物資を自家的に確保すると共に他方には、工場勞働による貨幣收入を併せ得て今日の狀態に於いては生活上最も恵まれたる地位にあるとさへせられてゐるが、此の事は生活全體の問題としての當否は暫く措くとしても、農業生産上に於ける非供出性の故に相當重要な問題ならざる

を得ない。此の事は反對に地方工場に勤務する工員が餘暇労働又は家族労働を以つて、偶々農家の工員化によつて生じた餘剩農地又は返還せられたる小作地の一部を借受けて自家菜園化する場合に就いても同斷である。

故に此の點に就いての問題は職工農家の激増に伴ひ(一)不足の労働力を以つて従來の相當面積の土地を耕作する爲め、充分に合理的且つ能率的經營を行ひ得ざる事、(二)更に殘留農業労働力自體の質的低下に伴ふ生産力の低下(三)従つて是等専事農耕作者の經營が自家供給に墮して供出性を喪失する事等により全體的な農業生産力に著しき損失を招く事になる。

此の故に農業經營の觀點からして相當面積の土地を確保せしむる以上、同時に農家人口の構成その技術的水準等に於いて或る程度の基準を嚴守せしむる必要がある。此の意味に於ける農家の理想的人口構成が如何ある可きやに就いては農業の種類其の他種々の條件によりて異同はあらうが青壯年層が全部放出せらるゝが如き構成が理想型に遠いものである事は云ふ迄もなく、茲に農業人口の移動を或程度迄禁止する必然性が生れて来る。同時に此の經營單位の必要條件に達しない農家、つまり茲で云ふ職工農家等の場合にありては其の保有農地を或る程度迄切り下げて過少勞力を以つて無理に耕作するといふが如き事態を避けせしめねばならぬ。農地の經營統合が問題となる所以である。

七

若し農家の工員化の問題が農家勞務の不足といふ事に現はれるとすれば問題は農工に互る勞務移動の問題に移つて来る。

工場を地方に分散せしむるに當つて工場勞務供源の問題は農家のみならず、工場自體にとりても大問題であるを

免れない。元來、勞務者の調達に就いては地元労働量によるものと全國的或ひは廣汎なる地方にその供給を仰ぐものとの二途がある。此の兩者は農工調整問題の上に於いて影響から見て著しい相違を示す。地元供出の勞務に依存する場合に於いては所謂通勤圏内の労働力量によつて工場の勞務方面よりする規模が制約せられ、これに同じく附近農村であるが通勤圏外にある者の移轉による者の労働力量が追加せられる。

通勤圏の大小は地勢及び交通機關の便否によつて定まるが大體に於いて一五軒を最大距離とし最大の頻數を見出す距離としては八軒と云はれてゐる。従つて此の場合には是等通勤圏内の供出し得る労働力量によつて工場の規模(労働量から見ると)が決定されるが、其の際も(一)農業勞務の必要量は保全するか或ひは(二)農業労働の必要量を無視して工業労働者の供出を求めるかによつて農村及び農業に及ぼす影響に著しい相違を來たす。若し前者に止まるならば、地方への工場進出は農家の餘剩勞力を吸収するに止まるが故に農業生産力に著しい潰滅的影響を及ぼすことなくして濟ませ得るが、若し後者の場合に於いては農業労働力の過多吸収となつて農業生産の潰滅を招來する。反之、労働力を他地方(全國的)に求める場合に於いては直接附近農村に勞務的影響を及ぼさぬ様に見えるが、此の場合と雖も地元労働力を全然吸収しない譯ではなく、他方面には大量の移動勞務者の殺到による地元の混亂は著しいものがある。たゞ此の種の問題は直接農業生産力に及ぼす性質のものでない事は認め得る。此の混亂の性質に就いては農村社會の問題として後述する。

近來地方に創設せらるゝ工場がいづれも大規模工場である點からして勞務者吸収の問題は現實には之れを中心として各種の混亂を引き起してゐる模様である。附近農村の勞力を過分に吸収した場合もあれば、全國的吸引による急激なる人口の激増に伴つて住宅食糧配給に異常な壓迫を加へてゐる場合もあり、更に他地方人の多くの流入が郷土

環境を破壊してゐる場合もある。故に今日の農工調整の問題は、此の種大工場に直面した農村の問題として把握せねば意味不明と云へる。

茲で農村と工業との關聯を考へてみるのも徒爾でなからう。元來、農村工業と云ふ言葉は可成昔から云はれてゐた、併し其の意味するところは今日の問題とは必ずしも一致してゐるものでなかつた。概括的に云へば農村に結びつけられた工業といふ問題について大體三期に分ける事が出来ると思ふ。

第一期は農村副業乃至農産物加工工業の時代で農村經濟の不況を救ふ對策として屢々古くから唱へられた所である。之れは農産物加工又は農村産物の工業的處理といふ意味で農村工業の名稱の下に農家經濟の救済を目標にしてゐた。第二期は名稱は同じ農村工業であつても農家の農閑餘剩勞力の吸収を目標にして純粹の工業を農村に興すもので其の代表例は理研のピストンリング加工に見られる。昭和中期、新潟、長野、滋賀の諸縣に於いて農家内又は共同作業所に於いて極めて簡単な設備と操作の下に餘剩勞力を吸収したものである。之れは創設者大河内正敏氏の語るところによれば前世界大戰に於ける歐洲婦人勞力の機械工業進出の實例に刺戟せられたものがあるが一時は頗る斯界の注目を惹いた。のみならず理研は工場立地に於いて早くも此の頃から工場を地方に進出せしめて恒定性のある地元勞力に依存する方針をとつた。新潟、群馬の諸縣に於ける理研關係の工場は其の實例である。

第三期即ち現在に於ける農村と工場との關係は第二期の農村工業とは更に趣を異にし、前述した様に農村の有閑勞力の吸収又は素朴なる共同作業所等の形式によるものでなくて大規模にして最も高度に發達した機械工場が農村と直接に接觸するに到つたもので、此の意味では全く新しい現象と云ふべく、第一期に見る様に農業的色彩もなければ、第二期に見る様な農村的規模も全く見當らない。近代工場對農村の直接的接觸が其の特色となつてゐる。

故に農工調整問題を以つて第一期又は第二期の問題と混同するは全く當を得ないものであるが、茲に問題となるのは、理研型工場の形式の採用が此の第三期の問題として復活しつゝあるやの點に關してである。つまり前にも述べた様に工場の規模を勞務數量の點から見て地元の餘剩勞力を吸収するに止まる程度に制限する形式で、之れは今日の農工調整問題に對する解決對策の一つとして提示せられてゐる。茲に於いて地方に分散せらる可き工場が大工場なるや又、中小工場たるを得るかの問題として検討を要する事となる。

八

地方に分散せる工場が大規模に過ぎ其の結果あらゆる方面から附近農村地方に致命的損害を與へるといふ事は全般的に指摘せられてゐる。併し更に悪い事にはそれらが單一に立地するのでなくして再び集中的傾向を示す、つまり同一地方に幾つかの大工場が僅の期間の内に前後して集中するといふ事から、此の影響は益々甚大となる情勢に對し重大な非難がある。

元來、工業地域規制により反對に建設すべき地域は關係當局に於いては既に具體的に指定せられてゐる筈であり、其れ等の地域については立地條件の整備すら唱へられてゐる。従つて特定地域に就いては幾許の工場を持ち得るかに就いても當然計畫のある可き筈であつて、徒らに指定地域に多きに過ぎる工場が集中すべき理のものではない。唯關係當局の努力にも拘らず、此の點に就いての計畫性は遺憾乍ら未だ實現を見ざるもの如く、殊に時局の逼迫は工場建設の極度迅速を要請してゐる爲めに充分なる計畫を俟つ餘猶なくして大工場が簇立するの實情にある。之れ一面には國土・地方計畫法の具體的施行を缺く爲めとも見られるが、いづれにもせよ折角集中過大工場地帯の増大を抑制し、出來得べくんば更にこれを疎開せんとする矢先、新增設地帯に超大規模工場が集合する事によりて新し

き工業地帯の過大化を惹起せんとするは最も遺憾であり、折角の趣旨に之むく所頗る大である。國土計畫に體系づけられる地方計畫の具體化がひたすら要望せらるゝ點であつて、各地方毎に農業・工業其の他諸方面の活動力・資材・勞力等を充分勘考して一定地域に入れらる可き工場規模の最高制限が指定せらる可きであらう。然かも此の點についての基準設定に關する研究が人口問題研究所の館松氏其の他の人々によつて可なり具體的に行はれつつある場合に於いて猶更である。

誠に今日の農工調整問題の根元は單に大工場が地方に創設せらるゝといふ事にあるのでなく勞務者を干又は萬を以つて算ふる様な大工場の幾つかを集中する事にある。假りに理研型の工場が地元勞力の無理のない吸収を主眼として創設せられても、他の工場が之れに倣つて同一地方に雲集して來たのでは全く地元依存の趣旨は破壊せられて了ふ。殊に此の場合には假りに吸収せらる可き勞務者總數が同一であるとしても單なる一巨大工場の設けらるゝ場合と比較して幾つかの工場相互間を調整する作用の無い限り、及ぼす影響は更に悪性となる。是等の調整作用を體系的に行ひ得るものは地方計畫の確立である事、前に述べて通である。

此の點からして分散化された工場の規模に就いて二、三の疑義が提出されてゐる。具體的に云へば、假りに農村に及ぼす影響を勘考しないとしても、各工場は果して現在見る様な巨大規模を必然的に必要とするや否やに關し否定的見解が生じつつある。換言すれば工場經營自體の建前から云つても其の適性規模とも云ふ可きものが可なり低度のところ存するのではないか、而して現在は無用に規模を巨大化せしめてゐるのではないかと云ふ疑念がある。此の種の論者に從へば現在、地方農村を脅かしつつある様な巨大工場は大した損失なくしてもつと小規模に分割分散せしめ得るといふ見解を持つ。

唯、此の問題は次の様に二通に考へられる。

(一) 農村に立地する限り、附近農村に於いて農業經營上致命的打撃を與へぬ様な規模について考へる事、即ち工場經營上の建前以外の觀點を含めて考慮する事。

(二) 工場經營以外の建前は全然考慮に加へず、純粹に工場經營の建前から工場の合理的規模に就いて考へべき事。

理想的に云へば第二の場合が第一の場合に合致する事である。蓋し第一の場合のみ妥當するとなれば其處には工業經營上の有利性を幾分犠牲に供せねばならぬからである。唯工場の適性規模の問題は經營學的にも具體的には然かく簡単な問題ではない。勞務管理の點から云へば一工場三〇〇〇人を最高限度とするとか或は六〇〇〇名内外を可とするとか、それ／＼工業種目の如何によつて其の數は異なるであらうが、單に勞務管理の觀點のみより定まるものではなく、殊に近來に於いては勞務者生活設備等も併せ考へる必要上、抽象的理想的に設定された工場適性規模が假りに中規模のものであつたとしても其のまゝ實地に適用され難いのは云ふ迄もない。

九

元來、工場立地に就いては工場敷地としての好適地(平坦、乾燥地、水利)の外に交通、勞力、動力、原料等の諸關係が考慮せらるゝが統制經濟の強化せる今日にありては動もすると勞力及び生活設備に就いての諸點が無視せらるゝ傾がある。即ち勞務者に就いては勞務統制により、附近地は元より、必要とあれば一應は全國より必要量を確保し得るし、食糧就中、飯米は國家に於いて其の配給を確保するといふ點よりして、土地に於ける生活設備、生産並びに配給事情の如何を考慮せずして大規模の工場が創設せられ、多數の工員を一舉に集合せしめて生活環境に著

しい變動を興ふる場合が少くない。殊に住宅並びに生活施設の點に於いては窮乏が著しい。此の意味に於いて或る論者は工場建設は都市建設であるといふ事を實感した。或ひは又、是等の點を考慮して新設工場を直接四方農村のみの土地に設定せず、従來は比較的振はなかつたにせよ、地方中心として既に都會的生活施設を持つた地方都市に之れを立地せしむる様に提案せられてゐる。

此の事は勞務者の生活施設並びに便益について工場側が従來の如く之れを外部の設備(都市的設備)に委し切る事が不可能となつた最近の情勢に併せ考へて、新規の工場都市の問題として又、別個に考へらる可き問題であらう。要するに今日新しく大工場の出現に當面する農村側としては致命的の大打撃を免れる意味に於いて其の規模が巨大ならざる事を希ふのは當然であつて農業勞力の工業轉化としても、農地の潰廢としても之れを必要最低量に止め様とすべきが方針であらう。

農地の不必要なる潰廢としての工場敷地の餘分確保は之れ又、地方計畫的體系の未完成に基くものであつて、工場側としては將來の擴張を見越して事前に餘分面積を確保しおかねば、將來に於いて擴張困難となり、或ひは地價昂騰によつて不必要なる費用を負擔するの止むを得ざるに逢ふであらう。附近土地所有者の思惑もかゝる傾向を助長するであらうから、地方計畫の確立を俟つて、工場側としても必要面積は其の必要時に於いて何時にても確保出来る様に規定する事が必要である。之れは單に工場敷地のみならず、之れに附隨する諸施設(住宅、病院その他)に就いても同様である。既に述べた様に敷工場が何等統制を受けずに同一地域に聚集するが如き場合に於いては工場側の土地入手難に就いての懸念はなほ強化し従つて不必要に餘分を確保し、農地より離脱せしむる事となるであらう。本年六月四日閣議決定を見た食糧増産應急對策要綱に於いて、不耕作地の解消として工事建築豫定地の耕

作利用が擧げられてゐるが如きは、かゝる事情に對する必要なる緊急措置であらう。

10

農工調整問題は更に地方大工場の著しき進出が農村社會を壞滅に導く點に極めて重大なる問題を認めてゐる。農村社會が従來保守傳統の生活體系裡に在る事は云ふ迄もないが茲に近代的大工場が其の附近に出現する事により其の生活體系及び村落生活の基礎を根本から揺り動かされる事となる。今暫く此の點について各方面の問題を通觀してみよう。

第一に農村住民が是等大工場に對してどういふ態度をとるか云へば農村の保守性から云へば新規異質的なものに對しては一般的に背反的であるのを普通とする。農民はたとへ農業生活が苦しくとも農を以つて尚しとする矜がある。従つて棄農して工場勞務者其他に轉ずる事に對しては一應批判的である。勿論農村の過剩人口の捌口としては別であるが一農家が離農するが如きは相當重大な問題となる。農地を手離し工場敷地たらしめる事等についても農民側には都會人又は工場人の簡單には測知し難い様な深刻の感情が纏つてゐる。故に大工場が出来た、収入が良いと云ふ理由で簡單に誰れもが農から工へと移動するとは云へない。茲に従來の農村の良さがある。

此の點で村から第一に工場へ轉ずる者は誰かと云へば、必ずしも全部一様にさうとは云へないが、大體に於いて先づ百姓を厭ひ、或ひは稍勤勉を缺く爲めに農家經營の良好ならざる者が先づ第一に轉向をするを認められてゐる。或る篤農は農村に於ける人々を次の四種類に分類する、即ち第一は賢明な勤勉農家、第二は勤勉だが智力は普通又はそれ以下の農家、第三は賢明ではあるが勤勉ならざる農家、第四は賢明でもなく又勤勉にも非らざるものとなる。工場へ最も先きに移行するものは此の第四類と云はれてゐる。勿論こゝに云ふ勤勉不勤勉といふ事は農家としての

その問題で農事に出精するか否かの問題で、他の勤勞に於いてどうかうといふ問題ではない。次は第二類で之れは直ちに工場勞務者には成り切れぬが自由勞働に入る者が多く、第三類の賢明ではあるが農事に出精せぬ者は進んで工員にならうとはしないが何等かの機會を得ると大轉換をなしたはせる者である。

併し農耕を離れて工場に移る分子が幾分なりともかう云ふ性質のものとして觀察せられてゐる事は農村社會の問題として決して等閑視する事は出来ない。例へば工場通勤をやつてゐる飯米農家に就いては「飯米農家は割のいゝ存在である。村附合ひや其の他の負擔は村の人にやつて貰ひ乍ら、色々の配給は受ける、供出米の割當からは免れてゐる」といふ様な所感が漏されてゐるが如きは其の一例であり、或ひは従來村で幾分疑問視せられてゐた若者が一躍産業戰士として時代の花形となり颯爽として村の往還を濶歩し農繁期に於ける村人の多忙を外に其の餘暇を樂しむが如き風景は小さな問題とは云ひ條、生活問題としては農村社會の堅持に少なからざる悪影響を與へてゐる。

勿論今日の工場勞務への轉向はさうした一部の不健全分子を以つて補ひ得る程度のもものでは無いが、農工調整問題の觀察者は一應さうした事態に注目を拂つてゐる様であり、併せて健全農家への評價を高める様にしなければ皇國農村の健全性を保持し難いと説く因由も是等の事情に起因してゐる。

二

筆者は夙に農村社會を崩壊せしむる最有力の機縁は之れと生活體系を全く異にする工場生活に在りと見てゐるが今兩者を比較して見るに

(一) 作業の種類が單に農耕と工作とに於いて違ふのみならず作業時間に於いて季節的には一方が天然の季の運行に左右されるに對し工場作業に於いては一年中均分して季節的變動の無いのを原則とすると共に一日の作業時に

しても農家は太陽の運行が之れを規定するに對して工場に於いては時計が之れを定める。

従つて一方が閑な時、必ずしも他方も閑とは云ひ難く、一方の休養餘暇が他方のそれと一致しない。前項に述べた様に田、畑には既に出て働いてゐる者のある時に工場の通勤者は遅れて悠り出勤する。然かも野良では未だ働いてゐる者があるのに陽の高い内に工場勞務者はもう引き上げて来る。かうした作業時間の喰違が、工場生活が村の中に這込む限り、毎日の現象であるから極めて目立つのである。兩者の理解融和は理念的には可能であつても實際上、感情的にはさう簡單ではない。日曜休電日等による定例休日においても同様である。いづれにもせよ生活時間に於いて一つの村に二つの系統が對立する事は、少數の官吏を除いた大部分の者が今迄同一步調をとつてゐた村の生活の統制を亂す一因である。

(二) 収入形態の相違も見逃す事は出来ない。農家にありては實物收納に重きが置かれ、現金収入は極めて少いとされてゐるに對し、工員家庭にあつては比較的に自由のきく現金収入が多い。此の事は工員家庭に於いて都會的生活を導入するの機縁及び可能性を大とし、殊に飯米農家、工員農家の場合に於いては、既に述べた様に兩者の長所を具有して生活上最も多彩を示してゐる。此の事は前項で述べた一つの感情上の問題の素因ともなるもので、之れ又、生活體系の一つの對立である。

(三) 以上の諸點が既に對立的である所に加ふるに時代の要請は工業への進出に拍車をかけてゐる。工業部門への進出が大いに歓迎せられ國民學校卒業生等にも工場勞務者となる事が産業戰士の名を以つて呼ばれ時代の寵兒とせられる事が、然らば農村はといふ疑念を農村人に持たせる事となり惹いては厭農觀念を植付け原因ともなる。農村出の青少年工が工場地帯の大工場に入れば直に旋盤工、熟練工として一人前になれる様な期待を以つて出て來

てゐるといふ事は工場に於ける是等關係者の屢々歎く所であるが、かうした點から農村への社會・經濟的評價を高める可しといふ意見が擡頭してゐる。勿論農は國の基とは我國に於いて古來から云はれ來た事ではあるが、それが實質化してゐたか否かは疑問であつて、今日眞剣に此の問題が再考せられる所以である。所謂皇國農村の提唱も其の機縁の一端をこゝに置いてゐると云へよう。農村を安定ならしめてのみ、我國農業の保全が可能であるから。

要之、上述せる様な生活體系の相違するものを以つて一つの健全な社會を構成しようとする事は相當困難である。のみならず、たとへ大工場が附近農村からの通勤工員のみによつて構成されたとしても、農村側から見れば此の工場が從來封鎖的であり遮斷的であつた此の社會の外的接觸への契機を藏する事となり、農村の封鎖的環境を破る事至大である。假りに當該工場との關係が無くなつても再び歸農せずして、逆に大都市又は其の他に轉出するといふ危険はかうした工場生活を契機として容易に行はれ得る。

II

此の意味で農村保全の建前から云へば同一農村内に二種の生活系統を入れぬといふ事が結論される。或る部落では通勤工は村を出て貰ふといふ決議をしたと傳へられ、或る實際家は純農部落と工員部落とを地區的に分離せよとす。

勿論農家が色々の意味で兼業的であつても、二三男が大都市に移住してゐる場合、或ひは娘が家庭奉公してゐる場合等には生活系統が異つても日常生活に於いて兩者が入り混つてゐない丈けに問題は起り難い。茲で問題とするのは兩者が日常生活的に混同してゐる所から生起する困難についてである。故に通勤工員の家庭を分けるといふのは實際上は別として理念的には一應首肯し得る。筆者も既に、他の機會に之れを述べた事がある（「農村工業」昭

和十八年新年號）つまり工業と農村の直接の結合よりも其の中間に或る媒介を置いた結びつき、即ち田舎町（之れは工場都市であつて差支ない）をおき、農村から解放された勞務人口は此の町に生活し、村から見れば一種の出稼型式をとらしめる事になる方が望ましいのではなからうか。

要するに農村社會の確保が農業政策上にも人口政策上にも必要とあるならば、其の社會の郷土的環境を保全する方法を考へる必要がある。それには地元勞働に依存する場合に於いても從來の生活慣習を根本的に崩壊せしむる様な方法は避けられねばならぬが、逆に全國的に廣く勞務者を吸収する事も亦、環境破壊となる。何故ならば、移動して來た勞務者について未知の土地は郷土性を持たぬと共に是等多數の未知者を收容した地元にとつても、未知者の多數來住によつて今迄の平穩渾一の空氣を破られるからである。屢々さうした勞務者の大群が地元民の怨嗟の的にならぬまでも、白眼視せられる事例には乏しくないであらう。斯くの如き環境破壊に伴ふ精神的混亂は決して等閑に附してはならぬ事を銘記すべきである。

III

扱、農工調整問題を廻る諸關係については以上を以つて大體の通觀を了へた。勿論なほ残した問題も少なくないと思ふが主な論點は擧げ得たと思ふ。然らば其の解決の對策や如何にといふと、之れ又相當の難問題である。或ひは其の解決を獨逸のジードルング的に求め様とする者もあらうし、從つて農工調整の理想型を描く事も出来る。併し、唯、時局の逼迫がさうした理想への悠長な建設を許し難い所にある事も認められねばならぬ。はじめにも述べた様にさうした急迫下に農工調整の問題は生起してゐる事を忘れてはならぬ。從つて今日の狀態、或る程度の混亂は何人も承知でやつてゐるのであつて茲に安易な解決策への一方途が提唱される所以がある。

その安易な解決策とは何かと云へば理想工村又は地方計畫の完成といふ様な問題は後廻しにして工場が地方に進出した際に農村側の事情をよく理解しその理解に基きて充分對應措置を考へるといふ事である。具體的には休日其他に就いて農村の慣行風習等に併せる事は必ずしも不可能であるまい。例へば正月盆等についての新舊曆による喰違ひは動もすると農村の慣行を破ると共に工場規律を亂す因ともなる(農民出の工具は舊正月舊盆にも勝手に出勤して下ふ)農村に出た工場側の言分として農家工具には出勤についての觀念が頗る缺除してゐる事が指摘してゐるが農村生活にあつては時間的に適確な通勤觀念は容易に構成されぬのが至當であるかも知れない。吉田秀夫氏は之れに關して都市工員と農家工員との出勤に就いての考方の相違は單に罰則又は減給の如何による功利的なものではなくて生活觀念の相違によるものであると指摘されたが之れは至當な批評であらう。都市工員又は勤人にありては生活感情として出勤に對する同避的觀念が出來上つてゐるのである。

工場側がさうした農村慣行に對して好意的であるか否かは確かに農工調整に相當の効果を生むであらう。併し今日の大工場が何處までも農村の舊套的慣行を近代的な工場規律の内に取り込み得るかは疑問である。農繁期に工場作業を休止又は操短したり、農閑期に其の反對に擴張又は作業時間延長したりする様な農耕作業への完全な融合を求める事は不可能に近い。現に農村工業の理研型が此の統制經濟下にあつては其の本來の趣旨の行詰を生じた實例がある。一年總量に於いて假りに増減がなくとも年中に作業の均分化が無い様では、今日の情勢に間に合ひ兼ねると云はざるを得まい。此の點に就いては工場側が少くとも作業關係内に於いて農村慣行に歩を合せ得る餘地は非常に多く望み得ない。

唯、工場側が生活施設厚生設備其他の問題に就いて農村側にも充分好意的解放的である事は比較的容易に望み得るのではないかと思ふ。元來、町は村落の(少しく厭やな表現ではあるが)生活の中心、生活の光であると云へる。従つて生活の光明的指導を町に期待する事は農村として當然である。其れが従來は屢々搾取關係の様云はれ、或ひは町としては農民の期待に背いたりして不信を招いてゐた。

工場が近代的設備を以つて農村近傍の町に出來た場合、而して附近農民が工員化する様な場合に於いては工場の有するあらゆる施設を開放して地元人の利用厚生に委ねるが如き措置は最も歡迎すべきである。地元有志が工場誘致に狂奔するは屢々見聞するところであるが其の結果は往々にして地元不利多き事例に乏しくない。理研工場が工場内部に購買部を設けず地元商人を潤はしてゐるが如きは地元との友好關係を持つ一つの好例と云へる。農村との點を見るならば、機械技術的指導その他家庭生活指導の面に於いても工場側が農民側に働きかける可き餘地は多々あらう。

併し是等の好意的問題以外に就いての對策となれば相當解決に困難が多い。農業勞働力の打撃的吸收に就いては既に地方計畫による秩序ある統制の必要を説いた。不必要なる將來敷地確保を防止するには附近地域の地域指定を強化する必要がある。そして現實に敷地化さぬ間は充分耕作せしめる必要があり若し耕作中途にして耕作放棄土地引渡を迫らるゝ不安を懸念するならば其の補償の途も考ふ可きであらう。問題は遠き將來に於いてではなく現在目下、充分なる食糧自給を確保せんとするにあるから、現在充分に利用せしむ可き方途を講ずる必要がある。

若し従來の所有者、小作者をして耕作を繼續せしむる事が困難なれば工場側に於いて之れを經營するも一方であらう。

此の問題は工場農園の問題として慎重に検討して見る必要がある。既に工員農家が充分なる經營能力なくして相

當の面積をなほ保有してゐる事の弊あるを指摘した。或ひは飯米農家、自給農家化し、所謂一ウネ耕作化して供出能力低下を來してゐる實状についても語つた。之れが對策として筆者は一應の方法として工場農園の方法を提唱するものであるが、工員農家の零細耕地又は經營水準下の耕地を集合せしめて工員家族其他を利用して近代的農園を經營し當工場のみならず附近の需給者に青果蔬菜等を正式に配給する方法も亦、可能ではなからうか。勿論此の場合にありては附近の純粹農家と競争する事なき様に計畫する事は必要であるが、單に工場自體のみならず地元生活者の需要に應じ、所謂地元自給の方法に出る事も考へられる。又之れを通じて工場は附近農村への農業指導權も獲得出来るであらう。既に工場農園の企劃は具體化されてゐる二、三の實情を聞いてゐるが、地方大工場の發展と共に近接の耕地が菜園化し、一方には工場所在の住民が郊村に買出しを開始してゐる状態を招致してゐる今日、工場農園の問題も慎重早急に検討せらる可きではなからうか。

工員家庭の家族が無爲にして遊んでゐるといふ評判は屢々きくところであるが、さうかと云つて技能拙劣な自家菜園を設けたりする事は必ずしも能率的ではない。蓋し單に耕作技術の低拙なるのみならず、虫害其他に對する充分なる措置を怠り又は缺くが故に、其の害が一般農家にも及ぶ事決して尠くない。此の意味に於いても工場附近に於いて自家菜園化する事に對しては何等かの統制が必要である。

一四

工場建設が都市建設であるといふ場合に於いては、直接生産に關係のない方面についての配慮にも充分應ずるところがなければならぬ。殊に住宅厚生施設、配給施設等に就いては直接緊急生産に關聯ないとしても充分に考慮せぬと徒らに地元の困惑を引起すであらう。

工業都市の建設に就いては都市計畫方面に於いてそれ〴〵考想があり、農工兩全を目標として理想的生活形式を狙つてゐるが、工場都市の場合に於いては行政上其他の點に就いてなほ處置を要する問題が可なりあらう。大工場を分割分散してのジードリング形式の採用は理念的にはとにかく一般的採用には未だしと云ふ感がある。

又、農村方面から見ても日本經濟の新編成といふ點から云つて農村自體に舊形態から新形態へと展開する必要性があると思はれる。新農村の構想が即ち之れであるが、之れに關しては別の機會に譲り度いと思ふ。

結 び

要之、農工調整問題の對策としては既に考へらる可きものは考へ盡されたかの傾向があり之れが尙ほ問題となつてゐる所以は、既に述べた様に切迫せる情況が此の問題を生み出してゐるのであるからして、此の至難なる状態に對應しての處置を講ずるに非ざれば實現の望薄きものとならう。此の意味で農工兩當事者に於いて好意的了解によつて解決し得る方法等が比較的實行可能なるものとなる所以である。要するに恒久對策として〴〵なく應急對策としての問題としては再び解決の領域が制限せられるであらうが、唯應急對策と雖も恒久對策の體系、並びにその方向裡に捉えられぬと甚しき損失を招くであらう。